

続々 曜変天目

～ 国宝のあれこれ ～

齋藤 淳

静嘉堂文庫美術館丸の内へ

2021.6.10. 読売新聞に静嘉堂文庫美術館の移転前の「旅立ちの美術」展についての紹介記事が載っている。「三菱創業家の岩崎家に伝わる美術品を公開してきた東京都世田谷区の静嘉堂文庫美術館は来年、展示ギャラリーを東京・丸の内の明治生命館1階に移転する。世田谷での最後の企画展が6月13日迄開かれるとのことである。同文庫は1977年から展示を始め、この度その展示施設を移転するが、その後も保存、研究のための施設として使われ、庭園などは一般公開を続けるという。」

年が変わり、静嘉堂文庫美術館が2022年10月1日、東京丸の内「静嘉堂@丸の内」の愛称でスタートした。場所は、昭和の建物（昭和9年竣工）として初めて国の重要文化財に指定された明治生命館。元々は明治生命本社オフィスであったもので、イタリア産の大理石を柱に使った広いホワイエの空間自体が素晴らしい。そこで開館を記念した展覧会「響きあう名宝－曜変・琳派のかがやき」が始まり、所蔵する以下の国宝7点(重要文化財は84点所蔵とのこと)が全て展示公開された。「曜変天目茶碗」、俵屋宗達「源氏物語関屋

みおつくし 濤標図屏風」、てがいかねなが 手搔包永「太刀 銘 包永」、
「倭漢朗詠抄 太田切」、ちんぎ 禅機図断簡 智常
禅師図」、伝 馬遠「風雨山水図」、「与中峰明
本尺牘」。国宝以外にも大阪城落城（夏の陣）
の際に粉々になった破片から漆を使って驚異
の復元技術により蘇った大名物「唐物茄子茶
入 付藻茄子」や、尾形光琳「住之江蒔絵硯
箱」(これは残念ながら展示期間の関係で今回
私は観ることが出来なかった)、酒井抱一「絵
手鑑」等素晴らしい数多の名作が公開された。

静嘉堂文庫美術館について

この静嘉堂文庫美術館は、三菱財閥の初代岩崎彌太郎の弟である2代目彌之助が創始者で、その孫の4代目小彌太が更に蒐集を続けたとのこと。前々稿で、曜変天目茶碗でお茶を味わってみたいなどと、たわけたことを書いてしまったが、昭和9年にこの名器を購入した当の小彌太は「天下の名器、私に持ちうべからず。」といているのでご本人は口をつけたことがないのかもしれない（私なら一度はやってみたいが・・・）。そもそも曜変天目茶碗の色合いは今の緑色のお茶には合わない気がする（南宋の当時のお茶の色については前

稿参照)。

前々稿：2011 年 12 月紀要第 9 号拙著

「世界に三つの曜変天目」

前稿：2020 年 1 月紀要第 17 号同

「続 曜変天目」

入館前

私はその年（2022 年）の 10 月 13 日木曜日にやっと丸の内の静嘉堂文庫美術館に行くことが出来た。事前予約必須なのかと思ったが、当日現地での申し込みで、暫し順番待ちはするものの、めでたく入館できた。実は朝から雨の降る悪天候の日で、これこそ好機と、シャソニエでライブをやる前に急遽出かけた次第。千代田線二重橋前駅からならすぐなのだが、乗り換えをはしょって半蔵門線大手町駅から歩いて行ったら思ったよりも時間がかかってしまった。

入館の番が来るまでの間、明治生命館の中を見せてくれる見学コースがあるので、当然にこちらも眺めてきた。

曜変天目茶碗のぬいぐるみ

更に美術館の入り口脇にミュージアムショップがあり、時間をつぶすには事欠かない。今回ニュー静嘉堂を訪れた目的のひとつは実はこのショップでぬいぐるみを見ることであった。ぬいぐるみとはいってもパンダでもペンギンでもナポレオンフィッシュでもなく、茶碗のぬいぐるみを見に来た、というよりは

買いに来た。我が永年の恋人、曜変天目茶碗のぬいぐるみを売っているというのでやってきたのである。ほぼ原寸大で、図柄は静嘉堂のものを元にしており、両手で包み込み愛でることが出来る（ぬいぐるみですからお茶を入れて飲むことは出来ませんが）、これは何としても現物を見てみなくてはと勇んで参った次第。これだけ思い入れのある私にとって六千円弱のぬいぐるみは決して高いとは思わないのですが、結局購入しなかった。買いたくてもその時点で品切れとかでいずれにしても現物を持ち帰ることは出来なかったのだが、現物見本があまりにも美しくなく、期待してただけに大きな失望と落胆を感じた。曜変天目茶碗の延長線上にあるものとは到底思えない、これでは茶碗に失礼だろう、こんなものを世に出す業者を許せないとまで思ってしまった次第（関係者の方、お許し下さい、あくまでも一個人の勝手な感想です）。

代わりに何かないかと思ったら曜変天目茶碗の写真を貼り付けたピンズ（ピンバッジ）があったので二種類あるうち一つを購入（税込 800 円也）。その後仕事でも何度かジャケットにつけて使っているが、残念ながら未だに誰からも注目されたことがない、胸に茶碗つけてるとは誰も思わないでしょうね。

ついに入館

ショップであれこれ眺めていたらやっと入館の番が回ってきた。13 日の 14:40「お邪魔しま〜す」。一般大人一人税込 1,500 円。社会還元の一貫なのか、かなり良心的設定かと思う。

続々 曜変天目～国宝のあれこれ

因みに、三井記念美術館も日本橋の一等地にありながら入館料は一般 1,000 円である。こちらでは、2019 年の「国宝 雪松図と明治天皇への献茶」なる展示では円山応挙の国宝「雪松図屏風」、桃山時代の国宝「志野茶碗」等を鑑賞することが出来た。

さて久々に再会した静嘉堂文庫の曜変転目茶碗（徳川家光が春日局に与え稲葉家に伝来されたので稲葉天目といわれている）だが前回、旧静嘉堂文庫美術館で拝見したときの、天気の良い、光明るい日に、更に過度なくらい照明を当てていた展示よりは落ち着いた印象を受けた。真上から均等に光を当て、全体がよく見えるように工夫したそうである。

2022.12.4.OA（オンエア）のNHK「日曜美術館」に出演された静嘉堂文庫美術館の河野館長は、今回の移転は「いい作品を沢山の人に見てもらうのが理想的な美術館」との質量主義の考えによるものとのこと。その是非はともかく、観る側からすれば今回の丸の内への移転は大変有り難い（二子玉の皆様ごめんなさい）。

同館長は更に酒井抱一の「波図屏風」（展示期間の関係で私は観ることが出来なかった）について琳派としては珍しく、雅な金地ではなく銀地を使っているとし、尾形光琳の「波濤図屏風」（メトロポリタン美術館所蔵）の影響を受けていると語っている。又、同館長は曜変天目茶碗については、「その魅力を一言で言えば千変万化という言葉が一番ふさわしいと思う。自然光で観るとその度毎に表情を変える。」と語っている。

高田純次と曜変天目茶碗

2022.12.30. テレ朝でOAした「純散歩DX2022」では、自称テキトーオトコの高田純次が、十津川警部シリーズで共演していた絡みか高橋英樹と二人で丸の内にやってきて静嘉堂文庫美術館に入館。曜変天目茶碗に对面第一声「こんなちっちゃいの」・・・さすがの反応で、その後もしきりに値段を気にしていた（金額評価については前稿参照）。この番組の映像で、ショップに曜変天目茶碗の商品名で税込 1,980,000 円の器が売られていたが、実は陶磁器ではなく漆器とのこと。木の碗に輪島塗の職人が漆を塗り制作した蒔絵の作品である。現物は見ていないが、TV映像で見る限りは、似せて作ってはいるが、色合い、光彩の具合も本物とは異なり、全体にくすんだ印象で、私はとても二百万出す気にはなれない。とはいいいながら売約済の札が貼ってあった、購入された方ごめんなさい。買えない者のひがみです。

時折新聞等で曜変天目茶碗（碗ではなく土偏に完を組み合わせてとワンとしている）と称して通信販売の広告が出ている。一括払い税込 1,100,000 円というものの写真を見ると、新聞紙面の白黒のものなのでその出来映えの程は良くは判らないが、売り言葉では「国宝に迫る奇跡を手中に収めると言っても過言ではありません」というものだそうで、これも購入はしておりません。

B S 日テレ 2022.11.1. OAの「ぶらぶら美術・博物館」で固定メンバーの「おぎやはぎ」の矢作兼が丸の内の静嘉堂文庫美術館で曜変天目茶碗に对面第一声「うわーなんか光っているなあ」。ある意味正しい反応で、前述した

ように最新鋭の照明技術で口径のところだけ光を当てているのでかような反応となったのであろう。

曜変天目茶碗は普段使いの什器だったのだろうか？

私の話に戻るが、種々の展示品と曜変天目茶碗の鑑賞、その前の大手町からの歩きで少々疲れたのと、その後のライブまで暫く時間があったため、広々と且つ美しいホワイエの椅子で今回の特別展のパンフレットを眺めていたら、2009年中国浙江省杭州の工事現場から発見された陶片の写りが載っていた。陶片とは云っても高台こうだいを含み全体の四分の三ほどのもので光彩も鮮やかに出ており、曜変天目茶碗とっていいものと思える。静嘉堂文庫美術館の長谷川祥子氏の記述によれば「出土地点は南安臨安城の都亭駅（迎賓館）や皇宮の邸宅等に該当する可能性が高く、皇帝が内外の来賓に賞翫されたと推測される。」とのことであるが、もしそのような用途で使われていたものだとしたら、曜変天目茶碗がそもそもどういうものであったのかについての前々稿で検討した内容とかけ離れた世界になってしまう。つまり、皇帝が好むものは青磁、白磁等の完全無欠なもので、それとは違い、普段使いの茶碗がたまたま窯変した出来そこないのものは当時の中国では珍重されていなかった、その一部が曜変天目茶碗だったという見方は正しくなかったということになってしまう。はてさてその真偽の程はどうなのだろう・・・

国宝とは

今まで何かと国宝だ、重要文化財だと拘って記述してきたが、国宝については前々稿で、両者の違いについては前稿で触れた。国宝が幾つあるのかについては2001年6月時点で1059件、2020年10月時点で1120件（国宝を含む重要文化財は13281件）である。かように国宝の数は増えているのだが、その増加に絡んだ報道がある。「文化審議会は(2022年11月)18日、中国東晋時代の書聖・王羲之の書簡を唐代に精巧に写した『喪乱帖』^{そうらんじょう}など、宮内庁三の丸尚蔵館が収蔵する書籍・典籍を含む美術工芸品計4件を国宝に、同館収蔵の南蛮屏風などを含む計47件を重要文化財に、それぞれ指定するよう文部科学省に答申した。・・・又、後期旧石器時代の・・・黒曜石などで作られた石器群・・・の国宝指定も答申した。縄文時代の土偶などは既に国宝になっているが、旧石器時代は初めてで、もっとも古い時代の国宝となる。」(2022.12.19. 読売)

謎の凶屏風

国宝に指定されていないから歴史的、美術的価値が劣ると云うことでは勿論ない、刀剣に比べ陶磁器の国宝指定が少ないのもそういう理由ではないと思われる（この理由については前稿で触れている）。とはいえ、少なくとも国宝に指定されたものが素晴らしいものであることは間違いなからう。2023.1.13. にO AされたNHKの「国宝へようこそ」という番組で平成30年に国宝に指定された「日月山水凶屏風」が紹介されていた。正直それま

続々 曜変天目～国宝のあれこれ

で全く知らないものであった。聖地高野山に詣でる高野街道の拠点大阪府河内長野市にある天野山金剛寺所蔵のもので、室町時代後期1500年前後に作成されたと思われる幅6メートルを超す屏風で、白州正子の「かくれ里」でも紹介されている。空は金銀であらわされ、右隻に黄金の太陽があり咲き誇る桜が春をあらわし、緑の木々が夏をあらわす。左隻に月明かりに照らされた茶の山肌が秋をあらわし、雪をまとった冬も表現されている。花々や葉は立体的に浮き上がっている。ぽっこり盛り上がった山はデフォルメ化され、空と雲の境目もよくわからない。逆巻く波頭は、葛飾北斎の富岳三十六景「神奈川沖浪裏」を思わせるような迫力。

しかし、描かれたのはこちらの屏風の方が北斎よりもはるかに先である。北斎の波頭を、激しい動きのものを瞬時に写真のように捉えたと称賛する声もあるが、既述の（後でも触れるが）、酒井抱一の「波図屏風」も尾形光琳の「波濤図屏風」も猛々しい波頭を見事に捉えている。北斎のそれはかぎ爪のような表現がされ、より鋭いものに見えるかもしれないが、初めて独創的に波頭の動きを描いたと云うほど画期的なものとは言い切れないという印象も受ける、数多の先輩達の工夫積み重ねの延長線上と云うべきではなかろうか。北斎作品の素晴らしさは波頭の表現以上に、波のうねりとそれに翻弄される船との組み合わせの妙にあるように思える。

「日月山水図屏風」についてはあまりにも独特で似ているものがないといわれている。しかし、それが自然の四季の移ろいをあらわしていることから、美術史家高岸輝東大准教授は、當麻寺奥の院の「十界図屏風」も仏教

にまつわる部分を外すと自然だけが描かれているので両者に共通性があると指摘するが、「十界図屏風」は禍々しい地獄の様を見せて民を脅すためのあざとい仏教画で、いずれにしても両者から受ける印象はあまりにも違い、その共通性の指摘は私には納得しづらいものに思える。「日月山水図屏風」は、やはり他に似たものがない孤高の画というべきかと思える。TV映像で観ても「何じゃこれは」という印象で、とにかく一度現物を観てみたいものである。

琳派と花鳥風月

今回の静嘉堂文庫美術館の特別展は「曜変・琳派のかがやき」との副題が付いており、琳派の名作が展示されていた。個人的には江戸琳派の代表格、酒井抱一（1761～1828）の「絵手鑑」の草花、虫たちの繊細さ、色合いに魅了された。琳派は、日本美術市場もっとも革新的で華やかな絵画様式と云われ、俵屋宗達が桃山時代の後期、京都で創始したとされ、江戸時代中期、尾形光琳が大成した。更にこの光琳を師と仰ぐ酒井抱一が深化させたといえよう。前述したように静嘉堂文庫美術館の河野館長は、酒井抱一の「波図屏風」について琳派としては珍しく、雅な金地ではなく銀地を使っていると話されていたが、尾形光琳の国宝「風神雷神図屏風」の裏絵は酒井抱一が任されており、その絵も「波図屏風」に通ずる銀地で表現されたもので、これも抱一の得意とする特徴とっていいかと思える。とはいえ、重要文化財の「夏秋図屏風」、宮内庁所蔵の「花鳥十二ヶ月図」や上記の「絵手鑑」の色彩、

筆使い、美しさも又格別である。

古来、美の基本は花鳥風月とっていいのではないかと思われる。まさに絵になる題材の宝庫なのである。それは音楽の世界でも同様で、これがどれだけ大勢の音楽家のイメージをかき立ててきたことか。ずばり「花鳥風月」という題の歌も複数歌われている。更には別の曲名ではあるが歌詞の中にこの全てが織り込まれているものもある「・・の庭は小鳥らの天国さ・・花、微笑み、月は昇る・・円かなる月影に風も声なく行き去りぬ・・」まさに花鳥風月で歌詞を書いたという感じであるが、曲自体はオーストリアの作曲家 Ralf Ervin (『奥様お手をどうぞ』も作曲) の手になるもので、原詞は von Beda, 訳詞三笠光司であるが、どの程度原詞に忠実な訳詞なのか不明なため、もともと花鳥風月が織り込まれていたのかは判らない。「イタリーの庭」というコンチネンタルタンゴなのだが、紹介した訳詞は美輪明宏、淡谷のり子、デイック・ミネが唱っているものとは違うものである。

板谷波山の空気感の謎

前々稿で、板谷波山 (1872~1963) についても触れたが、彼の作品でも花や鳥が多く描かれており、以前よりペールを掛けたような淡い独特の雰囲気はどの様にして醸し出しているのかと不思議に思っていた。折しも NHK で 2023.2.19. に日曜美術館「完璧なやきものを求めて 板谷波山の挑戦」なる番組が OA された。波山の代表作が、近代の焼き物で初めて重要文化財に指定された「葆光彩磁珍果文花瓶」(大正 6 年) であろう、番組でも薄

衣を被せたような独特なマット光沢と紹介している。学習院大学の荒川正明教授によれば、波山が自ら開発した光を包み込む葆光釉^{ほこうゆう}を使って、小さな気泡が全体を覆っているためあの質感が出せるのだそうである。そしてあの立体感、波山が東京美術学校で高村光雲の元、彫刻を学んだ素地があり、土を彫刻刀で彫った浮き彫りをベースに彩色し、釉薬を掛けて焼成しているからだとのことである。

作品は勿論素晴らしいのだが、番組の最後に波山の言が紹介されている。「私は他の世の中のことは何も考えないで、土をいじり、窯を燃やしていきたい。これが私の至願だ。楽しさは自ずとその中にある。」楽しみ、幸せは人それぞれで、他人が定義したり、見える化と称して指標化したり、幸不幸を押しつけるのではなく自らが感じ取るものであろう。幸せを自分なりに感じ取ることの出来る人は幸せであり、それが出来ない人は他人がどう決めつけようと幸福感をもつことは出来ない。完璧主義者でストイックな厳しい道を歩んでいながらも、波山は其中で自らの幸せを感じ取ることの出来た人なのであろう。あの流麗で優美な線、その重なり具合、明るい色彩、柔和に醸し出される空気感、肌感、決して高い技術力、熟達の職人技だけで作り出されるものではないと思われる。

長谷川等伯の空気感

空気感と云えば、画の世界では長谷川等伯の国宝「松林図屏風」を取り上げたい。朝霧が立ちこめる松林を六曲一双の屏風に表現した水墨画であるが、松という木を描くと云う

よりは空気感を描くために木々を描いたと云うべきか。幽玄のようであり枝振りの描き方など筆致はかなり激しい感じである。等伯も傾倒していた南宋の禅僧画家牧谿もっけいのような中国伝来の水墨画ではあるがまさに日本そのものを描いているとも云われている等伯は、「楓図」や「松に秋草図」を描き、いずれも国宝となっているが、画面一杯に草木花葉が詰め込まれていて絢爛豪華ではあるが少し観賞疲れしてしまう感がある。観る方もそうなら描く方も同じで、等伯自身も「松林図屏風」のようなものを描きたくなつたのかもしれない。

現代の作品においても空気感が感じられるものは数多ある、平山郁夫であれば「皓月ブルーモスク」「夕静寂」更には絶筆と云われている「夕星」もそれを強く感じるし、東山魁夷のヨーロッパの都市の画も、日本の町並みの画にもそれを感じ、深く呼吸してみたいくなる。なかでも淡い雪降る京都を描いた「年暮る」は「蕪村の名作『夜色楼台万家図』を思わせる画境である。師走のある夕暮れのひととき、灰色の空から舞い降る羽毛のような雪におおわれて、ひっそりと静まりかえっている京の家並みである。見下ろすような視角をとっていても、作者の心は、京をいとおしむ気持ちにあふれている。」(現代日本の美術「東山魁夷」集英社の桑原住雄氏の作品解説) そう、雪の京都へ行かなくちゃ!

大徳寺の曜変天目茶碗を何故観ることが出来たのか、何故17年もかかったのか

前回大徳寺龍光院所蔵の曜変天目茶碗に逢えて、この話は終わったはずだったが、又、続きをしつこく書いてしまった。ただ、そのとき不思議だったのは、今までなかなか一般には見せてくれなかった茶碗を何故急にあちこちで公開するようになったのだろうかと云うことであった。これについては大徳寺の僧侶の方の以下の言が参考になると思われる。そもそも禅宗は保守的である。特に茶の湯の聖地とも言われる臨済宗大徳寺派総本山の大徳寺は、昔から所蔵物の公開という方向には消極的で、次の世代にそのまま残していくという姿勢であった。とはいえ、時代の移ろいで寺を取り巻く環境は変わってきており、これを守り維持していくためには公開も不可欠というように考えが変わってきた。文化財の中でも公開するものはしていこうというようになった。

大徳寺では応仁の乱で伽藍を消失した後、一休宗純和尚が再興し、桃山時代から戦国時代に掛けて各地の戦国大名の帰依を受けて塔頭寺院たっちゅうが整備されたが、殆どは通常は非公開であった。曜変天目茶碗を所蔵する龍光院もその一つであり、前稿で記した如く所蔵する国宝を一般人にすぎない私には見せてくれなかった、そのことは致し方ないことは思っている。ただ、今後はかなり積極的に塔頭寺院の内部や襖絵等を公開してくれるようである。勿論有料になります。

丸の内は静嘉堂文庫美術館だけではない

丸の内の静嘉堂文庫美術館を中心に話をしてきたので、最後に丸の内仲通りの屋外ギャラリーについても触れておきたい。ビジネスの中心地丸の内の目抜きを走る丸の内仲通り。大手町と有楽町を結ぶ 1.2 キロメートルの石畳の通りである。かなり前より整備され、彫刻の野外展示がなされ、界限ではパリ祭や東京ジャズ、ベートーヴェン生誕記念コンサート、イルミネーション等の催し物が随時行われている。2022.11.19. にテレビ東京で OA された「新美の巨人」で最近の展示物の紹介がされていた。番組が取り上げた時点では水玉の女王草間彌生の作品、ヘンリー・ムーアの羊の形等 19 点が屋外展示されていた。防護柵もなく自由に鑑賞でき、触れることも出来る。この丸の内ストリートギャラリーは 1972 年にスタートし、早半世紀が経過している。私が丸の内界限の企業に監査で伺うようになったときには既に展示が行われていた。当初は箱根彫刻の森美術館が作品を貸し出していたらしいが、その後も作品は数年周期で入れ替えているとのことなので、機会のある方は丸の内に出向いた折りに是非現物をご鑑賞下さい。少し足を伸ばせば 2010 年に復元された三菱

一号館美術館に立ち寄ることも出来る。このカフェもイングリッシュガーデンも落ち着いた空間である。また、私もまだ行ってないのだが、築 64 年（2022 年時点）にもなる大手町ビルの 1 階にもギャラリーが出来たそうである。丸の内界限には様々なブランドショップも多く軒を連ね、買い物にも事欠かない。昔、音響メーカーのリスニングルームがあったので、丸の内に仕事に行った折には、昼休みによく聴きに入っていたが、今はもうないのかもしれない。帝国劇場に足を伸ばせば、展示品の素晴らしさだけでなくガラス越しの景色も美しい出光美術館があった、上述の板谷波山や仙涯和尚、ルオー等の作品を鑑賞することが出来る。

結び

国宝とは行っても絵画、建築、彫刻、工芸、書跡・典籍、考古（「国宝の旅」講談社の巻末索引より）と様々な分野のものがあ、実は私が一番好きなのが巨大建造物である（ピラミッドは見ました、内二つは中にも入りました）。子供の頃からそうなのだから仕方がない、ただ、建築物に触れ出すときりがないので本稿では立ち入らないこととする。